

自分らしいインテリア

CONTENTS

インテリアに個性が光る住宅実例厳選3軒 ―「M」スタイルングとは?― コレクターの家
タイムレスな美しさを放つ名作住宅×名作家具 ―アート×インテリアの愉しみ― ルームウェアとホームアクセサリ



ML
MODERNLIVING



「デューン」を敷き詰めた「雪ヶ谷の家」のリビングルーム。室内に広がる景色の先に、グレーがかった白いタイルで構成された中庭が見える。

SENSE *of* TIMELESS

2つの名作が時を経て出会い、共鳴した タイムレスな美しさを放つ建築と家具

世界的に知られる建築家、谷口吉生のデビュー作「雪ヶ谷の家」。1975年に竣工したこの名作住宅が、新しいオーナーを迎えて美しくよみがえりました。フランス人デザイナーのピエール・ボランの家具をディスプレイする展覧会が昨年秋に開催され、新しい暮らしのビジョンを思い描きながら創造に取り組んだふたりの感性が、心地よい調和をつくり出していました。その空間の魅力をひとときます。

撮影：梶原敏英 文：土田貴宏 編集：高橋 敦

ピエール・ボランが1970年にデザインした「デューン」。畳にインスパイアされた、70cm四方の正方形を基調とするモジュール式家具だ。



リビングルームと中庭はガラスで仕切られるとともに、ガラスの壁が視界をフレーミングする。正面のドアの向こうには書斎と予備室がある。



中庭は全面に15×15cmの白いタイルを使用し、居住空間の一部と位置づけられたアートインスタレーションのような趣も感じさせる。

SENSE OF TIMELESS

住み継がれた谷口吉生の処女作「雪ヶ谷の家」



「雪ヶ谷の家」は、谷口吉生が建築事務所、計画・設計工房を設立した1975年に竣工した。東京都内の旗竿形の敷地に建てられた2階建てで、ほぼ正方形の中庭を取り囲んでL字形に居住空間を配置。一般的な住宅に比べて中庭の面積が大きいのは、谷口がここを生活のためのスペースと位置づけたからで、屋内とのつながりにもきめ細かく配慮している。全面を覆う白い正方形のタイルは、グレーがかった特注色のものを使用した。今回の改修では谷口自身が設計に携わり、当初の施工者である水澤工務店が工事を担当。タイルもオリジナルのものを使用して補修するなど、建物本来の姿を取り戻すことに成功している。水回りなどの設備も一新し、実際に暮らせる家としてよみがえった。また現在は展示会や撮影向けのレンタルも行い、その価値を広めようとしている。
<https://www.yukigayahouse.com>

Yoshio Taniguchi

Profile 谷口吉生
たにぐち よしお/1937年東京生まれ。慶應義塾大学、ハーバード大学、丹下健三都市・建築設計研究所などを経て75年に計画設計工房を設立。83年より谷口建築設計研究所長。代表作に豊田市美術館、ニューヨーク近代美術館新館など。

谷口吉生とピエール・ボラン、その調和の不思議

日本とフランスの偉大な クリエイションが響き合う

東京都内には珍しくない、戸建てや小規模なアパートメントが隣りなく立ち並ぶ住宅地。そんな街角で、細いアプローチを抜けると現れるこの家には誰もが息を飲むことだろう。世界的な建築家、谷口吉生が立ち上げて手がけた建物「雪ヶ谷の家」である。1975年の竣工して

、この家には時代に決して左右されないモダニズムの美がすみずみにそなわっている。

しばらく空き家となっていた雪ヶ谷の家だが、新しいオーナーの手によって改修され、2021年に往年の姿を取り戻した。竣工時と同様、改修設計に谷口自身が携わり、施工を水澤工務店が担当。白いタイルに包まれる広々とした中庭から、それを取り囲むようにプランニング

された居室まで、70年代の住宅がこれほど見事に、またオリジナルに忠実によみがえったのは快挙と言つていい。

の家でその家具約10点を展示するエキシビジョンが開催された。彼の評価が高まったのは1960年代、有機的なフォルムをもつ椅子を次々と発表した頃だった。それは旧時代の価値観を、若い世代の新しい価値観が乗り越えていった時代に当たる。1970年に大阪万博のフランス館を、翌年にはフランス大統領官邸エリゼ宮のインテリアを担当したことからも、当時のボランが第

一線にいたことがわかる。1983年にも彼はミッドラン大統領のためエリゼ宮のデザインを手掛けた。「ボラン・ボラン・ボラン」を主宰するのは、ボランの息子であるベンジヤミン・ボラン。彼にとつて父のデザインの魅力とは、機能とフォルムをきわめて美しく調和させたこと。そして広い視野をもってモダンデザインの革新に努めていたことだ。谷口吉生もそうだったのではないかと、彼は考えている。

やアメリカの近代建築を吸収し、自身の作風を確立したと聞いている。この家にはボラン・ボラン・ボランの家具を置くと、まるで両者が対話しているかのようだ。「中庭を眺めるリビングルームに設えた家具は「デューン」で、これはピエール・ボランが日本の職人を独自に解したデザインだといふ。4種類の立体的なモジュールで構成されており、床に座ると近い感覚でくつろぐことができる。「デューン」は1970年にアメリカのハーミンミラシオのため企画されたが、当時シヨックの影響を受けたため、当時は世に出ることがなかったという幻

のプロダクトだ。2階の小部屋にディスプレイされたのは、張りぐるみの「アルファ・チェア」と、脚部が花びらを思わせる「エリゼ・テーブル」。いずれも1971年にエリゼ宮のためにデザインされたもので、日本の家紋からの影響が指摘されている。ピエール・ボランは1950年代から本格的に家具のデザインに取り組み、2009年に世を去る直前まで活動した。時代ごとに新しい題材に挑み続けた、比較的多作なデザイナーである。「ボラン・ボラン・ボラン」では、その遺産を受け継ぐことにふさわしい、彼の意思がはつきり

込められた家具にフォーカスして復刻を行う。そのため製造が難しいものも多く、一部の家具はリミテッドエディション作品としている。こうしたクオリティの追求は、谷口の建築と呼称するのを感じさせる。雪ヶ谷の住宅に見られる緻密な「ディテールと、大胆な空間構成は、まさに彼ならではの、自分が信じるものを突き詰める姿勢が、この家のすべてににじみ出ている。

住空間の豊かさとは、家の広さや家具の豪華さと本質的に無関係なのかもしれない。時代を先んじたふたりのクリエイションの共鳴は、住むこの奥深さを再考させてくれる。



「ボラン ボラン ボラン」は2008年にスタートした家具レーベル。ピエール・ボランの妻マイア・ボランと息子のベンジヤミン・ボラン、その妻のアリス・ルモワヌを中心として、ピエールの残した家具の復刻を行う。また書籍や美術館での展示を通じ、その遺産の価値を発信してきた。2019年、建築家レム・コールハース率いるOMA設計の「ボルドーの家」で展覧会を開催。2022年10月から11月まで「雪ヶ谷の家」で行われた展覧会はそれに次ぐ企画で、住空間を通して「ボラン ボラン ボラン」の世界観を伝えた。「デューン」「カテドラル・テーブル」「エリゼ・ランプ」など約10点が屋内外に展示され、来場者は実際に家具に触れてそのクオリティを実感することができた。一連の家具はウェブサイトを通じて日本からのオーダーも受け付けている。<https://paulinpaulinpaulin.com>

Pierre Paulin

Profile ピエール・ボラン
1927年、フランス・パリ生まれ。彫刻を志したデザインに転向し、パリのエコール・カモンで学ぶ。モダニズムに影響を受けながら彫刻的な要素も取り入れた作風は独自のもの。公共施設のインテリアも多く手掛けた。2009年に逝去。

現代によみがえるピエール・ボランの幻の家具



アプローチを抜けて玄関のドアを開けると中庭が広がる。テーブルとベンチが一体になった屋外家具は1968年発表の「マイアミ・テーブル」。



夕景のリビングルームの様子。手前の家具は「デューン」、その先の床に敷いたマットは「タタミ」。ともに70cm四方のモジュールで構成されている。正面に見える照明器具「エリゼ・ランプ」は1972年に手掛けられたデザインで、植物をモチーフとし、光源からの光を花弁状のシェードが周囲に広げる。



家全体のバランスにふさわしいコンパクトなダイニングスペース。中央の「カテドラル・テーブル」は、1980年代初頭としては珍しいエディション作品の複製版。



リビングルームからわずかに低いレベルに配置された書斎。椅子は、北欧やアジアの影響を受けてデザインされたという「シェイズ・ドム」。



DATA

改修 雪ヶ谷の家
 設計 谷口建築設計研究所
 十郎田善彦建築工房
 敷地面積 281.66㎡
 総床面積 168.89㎡
 1階 111.21㎡
 2階 57.68㎡
 家族構成 夫婦
 所在地 東京都
 用途地域 第一種低層住居専用地域
 構造 PC造
 構造設計 金箱構造設計事務所
 工事期間 2020年7月～2021年5月
 施工 水澤工務店
 キッチン製作 フルトハウブ

MATERIALS

- 外部仕上げ
屋根 ウレタン塗膜防水
外壁 鉄筋コンクリート打ち放し
- 内部仕上げ
LDK
床 フローリング (TIMBER CREW)
壁・天井 PB+AEP
- 2階寝室・個室
床 カーペット
壁・天井 PB+AEP

INSTRUMENTS

- 照明機器
ガスコンロ・オープン：ガサノウ
食器棚：ミーレ
次栓金具：ドンブラハ
- 衛生機器
バスhtub：カルデハイ
水栓：ドンブラハ
洗面ボウル：アラベ

「アルファ・チェア」と「エリゼ・テーブル」は、ともに日本の家紋の影響をうかがえるデザイン。直線的な空間の中に優美なフォルムが映える。



1 中庭の開口部は、タイルのサイズに基づいて大きさやバランスが決定されている。この緻密さは谷口建築に一貫するものだ。2 「シェイズ・ドム」の背もたれは、中国の明時代の椅子を思わせる。3 「カテドラル・テーブル」の脚部はスリットを入れた板で構成。1980年代、複雑な構造をコンピューターの力を借りずに実現した。4 ダイニングとリビングルームやその上の小部屋を結ぶ階段。視界が広がる空間構成も、この家の特徴の一つ。